リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ～攘夷戦争鎮魂歌～』×『イメージ』　異次元を超えた絆の出会

黒神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ～攘夷戦争鎮魂歌～』×『イメージ』　異次元を超えた絆の出会い

【Ｎコード】
Ｎ８００２Ｋ

【作者名】
黒神

【あらすじ】
この小説は、赤夜叉さんの許可を貰って自分の小説『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ～攘夷戦争鎮魂歌～』と赤夜叉さんの小説『イメージ』を合成させた短編物語です。銀時、隼樹、スバル、セイバーの４人が出会える時、新たな戦いが始まる。そして、あの人物も登場！

攘夷戦争で数多くの天人を倒してきた伝説の武神ごと、白夜叉・坂田銀時。

理想の想いで様々な力を発揮する無限の可能性がありの葉谷資隼樹。

侍の強さに憧れ、大切な物を護る為に強くなる事を決意した青き魔導侍、スバル・ナカジマ。

イングランドの王で伝説の聖剣を持つ騎士王、セイバー。

２つの物語で活躍する男女がそれぞれ出会うとき、未知なる夢の世界で繰り広げられる戦いが幕を開ける。

＊

目の前に広がるのは、黒と紫色の空。

ーあれ？ここはどこ？ー

彼は床に倒れていて、うっすらと開けた片目で、闇に染まった空を見ている。

しかも何故か逆さまに建物が建てられている。

ーアレ？なんか建物が空に逆さまに建てられていねェ？ー

意味不明に思い込むと、良く見ても空の上に建物が立っているだけでなく、周りの空間に瓦礫や岩などが浮んでいる事がはっきりと分かる。

ーアレ？何で俺、こんなことになってんだっけ？アレ？これ確か『月間コンプエース　２０１０年　５月号』でも『魔法少女リリカルなのは×プリズマ☆イリヤ』と同じ展開になっていない？アレ？ー

＊

「ふぁああ～！！……ああ～良く寝た……」

ゆっくりと起き上がる彼。
銀髪の天然パーマに死んだ魚の様な眼をしており白い着物を着ていて木刀を脇に身につけている彼の名は坂田銀時。
原作『銀魂』及び『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ～攘夷志士鎮魂歌～』の主人公である。

「ってあれ？」

そして銀時は周りを良く見てみると、そこには海に飲み込まれた町と思わせるように海の上に大量の廃墟と貸したビルが建てられており、さらには空の上にも同じように海の上に廃墟と貸したビルが大量に建てられている。まるで魔法の空間と思わせる混乱的な光景に銀時は……

「なんだこりゃ？どうして空の上にビルがあるの？どうして海が空の上にあるの？っつうかここどこ？」

っとあんまり驚かない。
こう言う事は大抵なれている証拠である。
そんな銀時に気づいたかのように……

「あ……人がいた！」

っと1人の男が銀時に駆けつける。
ボサボサの髪に、オシャレとは呼べない地味な眼鏡を賭けている男が銀時に近づく。

「良かった……突然、変な場所に飛ばされた物……で……」

男は銀時を見て、喋るのを止める。
その表情はまるで珍獣を見たような光景である。

「……ひょっとして……貴方は……坂田銀時……ですか？」
「お前……なんで俺の名を……」

どうして自分の名を知っているかを不思議がる銀時に男は……

「ウソぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！？本物ォォォォォォォォォォォォ！？」
「どぁあああ！っつうか驚くんじゃねぇよ！」

男の驚きに銀時も驚く。

（マジかよ！？セイバーとフェイトだけじゃなく、今度は『銀魂』の坂田銀時かよ！？……ってでも今までアニメキャラと生で出会ってきたんだから今更驚くほどじゃないって訳だな？）

男がそう思うと、銀時は男に声をかける。

「おい、何でお前が俺の名を知っているんだ？ってか誰？」

「あ……ごめん！俺は葉谷資隼樹！……今から話すことを信じてくれますか？」

と、隼樹はどうして銀時の名を知っているかをその理由を言い出す。自分はオタクであって数多くの漫画とアニメを見ていて、その中には『銀魂』の事も良く知っている。

その為、銀時の名は良く知っており、同時に銀時がメチャメチャ強い事はメッチャ知っている。

ある日突然、『魔法少女リリカルなのは』と言う架空の世界に飛ばされて、『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』と言うゲームに登場するセイバーという少女のマスターになった訳である。

「なるほどね……んでお前は突然、フェイト達の世界に飛ばされてそのセイバーって女の主になった訳か？」

「え……驚かないんですか？」

「ああ……俺もある理由でフェイト達の世界にいるんだわ。しかも今お前がいる１０年後の……」

「１０年後！？」

銀時はどうして自分の世界じゃなくフェイトの世界にいるのかを説明する。

実は万事屋の一員である志村新八がある日、寺門親衛隊の隊員の１人から『魔法少女リリカルなのは』のＤＶＤを取り上げて、そのＤＶＤに移っているなのはに一目惚れしてロリコンに目覚めた事から、自分達は『リリカルなのは』の世界に関わってしまったのである。

新八はなのはの事を一目惚れしているため、アイドルオタクから、

アニメオタクだけじゃなくロリコンに目覚めたと銀時は呆れている。
コレには隼樹も唖然と苦笑する。
それ以来、フェイト達とは仲間関係になっている。
しかしある日、事故って１０年後に飛ばされていてしかも元の世界に戻る当てはなしである。
隼樹は銀時はもしや『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』の世界にいると確信すると、銀時から新八がロリコンに目覚めたと聞いて唖然とする。

「し……新八がまさかロリコンに目覚めるなんて……同じオタクとしてどういえば分からない」
「はぁ？何言っているの？新八とお前じゃ全然違うぞ？」

っと銀時が呆れて言い出す。
確かに自分と違って新八はオタクでも剣術を学んでいる。
自分とは全く違うと思い出す隼樹だが……

「お前はアニメオタクであって……新八は『アイドル＆アニメオタク変態ロリコン』なの」
「何か酷い言い方なんですけどォォォォォォォォォォォォォォォ！？」

っと隼樹は大量の汗を流してツッコム。

「ほぉー、お前良いツッコミの仕方をするな？その調子でツッコミを磨けば良いツッコミ役が出来るぞ？」
「結構です！」

さらにツッコム隼樹。

「ま……自己紹介はここまでにして、問題はどうやって元の世界に

戻れるかだ……」
「そう言えば……どうすれば良いんだ！？」
話は戻ってここはどこなのかを不思議がる2人。
すると、そんな2人に……
「ここは、複数の空間が相似性を無視して融合した世界のようです」
っと、突如の声に銀時と隼樹は振り向くと……1つのスケッチが自分の意志で突っ立っている。
銀時は「なんだこりゃー！？」っと驚くが、隼樹は別の意味で驚く。
「ってまさか！貴方はマジカルルビー！？」
そう、『プリズマ☆イリヤ』に出てくるイリヤのパートナーであるマジカルスケッチごとマジカルルビーである。
「その通りです！私こそは愛と正義の……ってそんな事はどうでも良いとして、緊急事態が発生したようです」
「緊急事態だァ？」
マジカルルビーの言葉に銀時は唖然とする。
「この空間は元々人為的なものだと思われます。コレを『人工空間（じんこうくうかん）』と名付けます。この人工空間は何者かの手によって作られた架空の空間ですので、本来ならば自動的に消えます。ですが、何かの原因で数多くの無数の時空空間が強制的にこの空間と融合され、次々と別の世界につながる時空の穴が広がっているんです。それも強力な引力が放たれて遠く離れた時空空間もこの空間と強制ユニオンされて、このままでは数多くの空間がこの架空空間と一体化し続けます。

そうなれば……大変な事になります」

「大変な事って？」

マジカルルビーの説明に恐る恐ると隼樹は質問してみる。

「もしこのままほうっておけば……大量の空間の圧力に耐え切れなくなったこの空間と一体化した数多くの空間は大爆発を起こし、その影響で数多くの世界が核爆破を行い、消えてしまいます」

「ええエエエ！？」

数多くの世界が消滅！？

マジカルルビーの言葉に銀時と隼樹は驚きを隠せなかった。

「それってつまり、銀さんや俺はもちろん、セイバー達の世界も消えてなくなってしまうじゃないか！」

「ふざけんじゃねぇよ！一体誰だこんな空間を作り出したバカは！」

あわあわと驚く隼樹とこの原因を作った人物に怒り出す銀時。

「犯人は不明ですが、こんな事を行う事ができるのは……おそらく相当な魔力を持った魔導師にしか出来ないと判断します。その魔導師を倒せば、この空間は爆破する前に消滅し、貴方達は元の世界に戻れるでしょう」

「それだったら早速探さなきゃ！」

隼樹は大急ぎでその魔導師を探そうとするが銀時が止める。

「待て！焦るのはわかるが……その魔導師の特徴をも俺達は知らねぇんだぞ？どうやって探す？」

「う……」

銀時に言われて黙り込む隼樹。
だがマジカルルビーが情報らしき物を言い出す。

「大丈夫です。犯人が魔導師であるならば……魔力を持っているでしょう。そんなときは私がその魔力をも杜に2人を案内しましょう」
「本当！？」

隼樹は希望を持った隼樹は喜びだす。

「とりあえずお二人の名を聞かせてもらいます」
「えー、坂田銀時でーす」
「葉谷資隼樹、隼樹で良いよ」

2人の名を聞いたルビーは早速、隼樹に言い出す。

「では隼樹さん、貴方は以前に『ジュエルシード』を体内に埋められていて投影魔術を使えるようになりましたね」
「な！？」

隼樹にジュエルシードが埋まっている事に驚く銀時。
ロストロギアに関する知識は銀時も良く知っていた。

「はい……一応……」
「そんな貴方に、コレを」

っとマジカルルビーはどこから出したかっとツッコムばかりに首飾りの赤い宝石を隼樹に渡す。
あの赤い悪魔が衛宮士郎を復活させる為に使った赤い宝石と一緒で

ある。

「コレを身につけるだけで……イメージの力は増幅され、『エクスカリバー』など宝具など投影可能になり、しかも使用するときにイメージしながら扱えれば完璧に使いこなせます！」

「え！？マジで！？」

自分も使いこなせると聞いて隼樹は注目する。

「ですが、その宝石に込められている魔力はあくまで一定的な為し、使い切れば自然的に消滅します」

「そ……そうなんだ」

それは少しガッカリする隼樹は、宝石の首飾りをかける。

「おい……なんなんだそのイメージって？」

銀時が不思議そうに質問する。

「……俺の力の源で、魔術の1つですが。何かをイメージして、それを実在化させる魔術の一種。……ざっとこんな感じ」

そう言うと、隼樹はマジカルルビーを右手に持って、目を閉じて頭の中でイメージを浮かべる。

イメージするのは、2本の剣。黒と白の陰陽の夫婦剣、干将（かんしょう）・莫耶（ばくや）。

そして数秒後、隼樹の手には干将・莫耶が握られていた。

「おおぉー！スゲェなおい！武器を投影できるなんて！」

銀時は興奮して驚きだす。

「え……いや、それほどでも……でもコレ、レプリカを生み出す魔術なので……すぐに消える中途半端な魔術なんだ……」
「いやいや、お前それだけでも十分インパクトはあるよ。新八と違って」
「なんでそこで新八が出てくんの！？」

新八に絡む銀時にツッコム隼樹。
だが隼樹は不思議に思った。
以前に投影魔術をした時に干将・莫耶を投影した時には重くて扱えなかったが、何故か今回投影した干将・莫耶には全く重さが感じ取れない。しかもイメージしながら剣舞のように舞うと、素人とは思えない無駄のない素早い動きで振るう。
これもルビーから渡された首飾りの宝石の力であろう。
そして自然的に投影した干将・莫耶は消滅する。

「とにかく、さっさと黒幕引きずり出そうぜ？」
「了解！」

銀時がそう言うと、隼樹は返事してマジカルルビーと共について行くことにした。
っとその時……

ドカァーン！

「！？」

銀時達の前後ろに何かが落下していく轟音が聞こえる。
そこには、体がもじゃもじゃとしており鋭い目つきで銀時と隼樹を睨みつける巨大な魔物二匹が前と後ろを囲んでいた。

「ってなんじゃこりゃー！？」

っと銀時と隼樹は叫びだす。

「あれはこの空間に潜むクリーチャーだと思われます。外見どおりいたって凶暴ですのでご注意を」

マジカルルビーの説明を聞いた直後、同時に体中から触手らしき物を鞭のように放って2人を襲う。

「いんぎゃあああああああああああああ！逃げろォォォォォォォォォォォォォォ！」

銀時と隼樹は叫びだしてマジカルルビーと共に猛スピードで逃げ出す。

そんな2人に容赦なく襲いだす2匹の触手攻撃は半端じゃなく2人を襲い、2人はギリギリに交わし続ける。

「銀さァァァァァァァァァァん！なんかあいつら追ってくるんですけどぉぉぉぉぉぉぉぉ！？」

「ちぃ！しかたがねぇ！」

銀時は逃げてもきりがないと確信して逃げるのを止めて、魔物達に駆けつける。

そして愛刀の『星砕』を抜いて、襲ってくる無数の触手攻撃を木刀を振り続けて弾き返す。

「速い！？」

「大した身体能力です！外見とは思えないあの身のこなし、只者じ

ゃないですね！」

隼樹は漫画で見たどおりの銀時の素早さを生で見て驚き、マジカルルビーも銀時の素早さに注目する。

「てやぁあああああああああああああああああああああ！」

そして木刀を素早く大きく振り、魔物一匹を一刀両断した。

だがすぐにもう一匹の魔物の触手が銀時を襲う。

「銀さん！」

「！？」

ドカァァァァァァァァァァァァァァァンン！

触手は銀時に直撃した。

今のは気づいても裂ける事はできなかった。

慌てて隼樹は銀時に駆けつけると……

「……ククク」

笑い声が聞こえた。

「悪ぃなデカブツ」

笑みを浮かべながら、銀時が言った。

隼樹は、銀時は無事であると安心するとよく見た。

魔物が放った触手は、木刀によって防がれていた。

「こんなもんじゃ…」

銀時は顔を上げて魔物を見た。

「こんなもんじゃ、俺達の魂は砕けねーよ」

不敵な笑みを浮かべて言いだすと一歩前に踏込み、大きく飛び越えて渾身の一撃を放つように木刀を振ると魔物は横一線に真っ二つに斬られて消滅した。

「スッゲェー……」

銀時の強さに感動して驚く隼樹。

自分も漫画で銀時のデタラメ的な強さは知っているが、生で良く見てみると改めて驚きを隠せなかった。

ドカァーン！

「！？」

だが、隼樹とマジカルルビーの背後から、すぐにもう1匹の魔物が現れた。

「ぎゃああああああああああ！出たァァァァァァァァァァァ！」

「ヤバイですゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！」

2人は思わず絶叫する。

銀時は舌打ちをして急いで2人に駆けつけるが、とても間に合わない。

そして魔物の触手が放たれるその瞬間だった！

「蒼波一閃（そうはいっせん）！」

突如、蒼い斬撃が天空から降ってきて魔物を一刀両断にする。
隼樹とマジカルルビーは一体何があったのかを唖然と驚くと、見覚えのあるこの技にある人物がいると確信する。
そして3人は天空を見上げると……

「あー、やっぱり銀さんがいた♪」

そこには1人の少女がいた。
青い髪でショートカットのボーイッシュな少女で、頭に白い鉢巻をかけていて、何やら白いロングコートを着ていて緑色の瞳をしている。
右手には鍔がなくて、その部分に水色の宝玉が埋まっている蒼い刀、そして左手には鋼鉄の蒼い鞘を持っており、背中には唾の部分が竜の頭で口から刀身を出しているかの様な紅く輝く大刀を背負っていて、右肩に魔力によって生み出された蒼く輝く天使の片翼が生えている。

そんな少女に、隼樹は驚きだす。
容姿は違えど、あの少女はまちがいなく自分の知っている人物！

（あ……あの子って……まさかスバル・ナカジマ！？）

そう、アニメ『魔法少女リリカルなのはシリーズ』の第三期で登場する重要人物の1人であり、高町なのはに憧れる新人魔道士であるフォワード部隊の1人であるスバル・ナカジマである。
そんな人物がどうしてここにいるのか唖然とするが、それ以上に今時分の目の前にいるスバルは、自分の知っているスバルの容姿とは

まったく別であった。

（ってか、スバルって空を飛べたっけ！？背中に片翼が生えていたっけ！？スバルって剣を使っていたっけ！？）

全く別人と思わせるスバルの容姿に隼樹は驚くばかりである。

（確かスバルの使用デバイスって、原作だと拳装着型アームドデバイスの『リボルバーナックル』とインラインスケート型インテリジェントデバイスの『マッハキャリバー』だよね！？それがどうして日本刀と大刀！？）

原作の常識を打ち破っているスバルの使用デバイスに驚く隼樹。

そして銀時を見つけたスバルはゆっくりと陸に降りて、蒼い片翼を消して銀時に駆けつける。

「スバル……お前もこの空間に飛ばされていたのか？」

「はい。何か眼が覚めたらこの場所に飛ばされて……ティア達もこの世界に飛ばされていると思って探していたんですが……探しても見つからなくて……でもそんなときに銀さんが見つかって、本当に良かった」

銀時と再会できて安心するスバル。

そんなスバルを見て隼樹とマジカルルビーは驚きだす。

（小声）「何か知らないけど……あのスバル、なんかメッチャ魔力が原作とは比べ物にならないほど高そうだけど！」

（小声）「隼樹さんも分かりますか……実は私も『魔法少女リリカルなのはシリーズ』の知識は完璧に持っていますが……あのスバルは原作とは別人のようです！」

（小声）「どういう意味！？」

コソコソと話している隼樹とマジカルルビー。
ルビーから目の前にいるスバルは原作とは別人と聞いて驚く隼樹。

（小声）「魔力を感じて測ってみたんですが……あのスバルは原作のスバルとは大違いと思わせるほどの大幅な魔力を持っています！しかもその魔力は『魔法少女リリカルなのは』風に計れば、ＳＳ＋ランクは行きます！」
（小声）「！？……それって、『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』のフェイトとなのは以上の魔力じゃねぇか！？」

信じられないと驚く隼樹。
実際にスバルは、フォワード部隊に入った時点では魔導師ランクは陸戦ＡＡＡ＋、魔導競技大会で陸戦Ｓ、そしてカリバン事件で飛行能力付きのＩＳを発動させる事が可能になり、さらに使用デバイスが増えた事で空戦ＳＳ＋。
はっきり言って原作の常識を打ち破る魔導師ステータスである。
しかも何やら銀時と親しそうに話しているところもまたおかしい。
一体どうして原作とはそこまで大違いなのか恐る恐ると訪ねてみる。

「あ……あのう……貴方は銀さんとお知り合いで？」

隼樹に声をかけられたスバルは隼樹に気づく。

「あ、すみません。紹介遅れましたっ」

隼樹に気づくスバルは挨拶する。

「機動六課、フォワード部隊『スターズ分隊』のスバル・ナカジマ

です。訳があってこの空間に飛ばされちゃいました」
「あ……ああ。葉谷資隼樹って言うんだ。隼樹で良いよ……それより、何か銀さんの知り合いのようだけど、どうして剣を持っているの？」
不思議そうに隼樹はスバルに質問する。
「あ、コレにはあるわけがあって……」
スバルはどうして自分が剣で戦うと話そうとすると、
「あ……空から何かがこっちに近づいてきます」
ルビーの一言に銀時達は空を見上げると、空から1人の少女がやってきてこの場に陸地する。
そして隼樹を見つけて安心するように少女は近づく。
「ジュンキ、ここにいましたか」
宝石のような碧色の瞳、綺麗な金髪、青いドレスの上に銀色の甲冑を身に纏った美しき少女。
その少女こそ、隼樹のパートナー的な存在である……
「セイバー！？セイバーもこの空間に飛ばされたんだ！？」
「はい、眼が覚めたら訳の分からない場所に飛ばされた為、正直焦りました。ですが隼樹の気を感じて探し回りましたが……無事で何よりです」
再会できて喜びだす2人。
そしてセイバーは銀時とスバルを見て気が付く。

「この2人はお知り合いですが？」
「ああ、さっき知り合ったばかりさ。銀さん、スバル、この人は……って銀さん？スバル？」

2人の様子がおかしいと隼樹は驚きだす。
それは、セイバーの姿を見て銀時とスバルは驚きだして唖然としている。
特にスバルにとっては信じかたい事であった。セイバーの姿は、自分の良く知っている人物と一緒であるからだ。
その為、スバルは思わず……

「……ア……アーサァ？」

亡き親友の名を口に出す。
それを聞いたセイバーは驚きだす。

「何故！？貴方が私の真名を！？」

セイバーがそう言うと、スバルは驚きだす。
コレには隼樹も驚きを隠せなかった。
スバルが口にしたのはセイバーの真名である伝説の騎士王の名であった。
だが良く聞けば発音が微妙に違っているが、それでも『リリカルなのは』キャラが『Ｆａｔｅ』キャラのセイバーの真名を知っているのはおかしいと考える。
しかし……

「ああ、ごめんなさい！私の亡き親友に似ていたから……つい……」

スバルが頭を下げて謝罪する。
セイバーはどうやら勘違いされたと見て、スバルを疑わない。
銀時はセイバーを見て、スバルの親友であるアーサァと一緒であると知って驚きだした。

（驚いたぜ……一瞬アーサァが生き返ったと思ったじゃねぇか）

銀時は不思議そうにそう思うと……

「あのう……スバルの知り合いにセイバーと似ている人がいるの？それにアーサァって」

隼樹は不思議そうに質問する。
『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』はもちろん、『銀魂』の原作でもそんな人物は存在しない。
増してセイバー似の人物にスバルの知り合いは原作には存在しないはず。

「……アーサァの事は、私がどうして剣を持っているかを話します……」

スバルは、どうして自分が剣を使うかをアーサァの件と共に話し出す。

「その前にせっかくですしお互いに自己紹介しませんか？こうして出会えたのも何かの縁ですし。あ、私の名は愛と正義の……」
「それはもう良い！」

ルビーの紹介説明に銀時と隼樹がツッコム。
そんなツッコミにシュンとした隼樹は……

「……マジカル・ルビーと申します」
普通に挨拶する。
とても残念そうに。

「どうもー、坂田銀時でーす」
「俺は葉谷資隼樹、隼樹で良いよ」
「私、スバル・ナカジマと言います♪」
「サーヴァント、セイバーと申します」

お互いの自己紹介を終えた所でスバルは話し出す。

１０年前、スバルは１人の大親友であるアーサァ・Ｋ（キング）・ソルドゥナイトと再会の約束をして別れだした。
その時にスバルはアーサァからお守り代わりとして１つのデバイスを渡した。
それがスバルの使用デバイス、日本刀型のカヴェゼシェンデバイスである『ティルヴィングエア』である。
そして４年前、火事で１人迷子になりながらも家族を探していく中で銀時に助けられ、護る力がどれ程大きいかを知って剣術を学んだ。
銀時のように力ある剣術は出来ないのであれば、さらに剣速が速くなる剣術を極める事を選んだ。
それから４年後に銀時と再会して、憧れの人の元で強くなる事を選んで、機動六課に入った。
さらにその数日後にスバルはアーサァと十年ぶりに再会するが、アーサァが自分と同じ戦闘機人であった為にウゼルと言う復讐の闇に堕ちた者の命令の為だけにためらいなくスバルは襲われた。
一度は敗北したが、それはスバルの迷いが完全に消えていなかった

からである。
そしてアーサァを助け出す為にスバルはもう一度アーサァと戦い、死闘の果てにやがては勝利した。
黒幕のウゼルもやっつけて一件落着と思われた後、戦いの舞台となった要塞のエネルギーが暴発して、それを止める為にアーサァは最後はスバルの親友として、スバル達を助け出す為にエネルギー制御装置を動かして、暴発を抑えるのを引き換えにアーサァはエネルギーに飲み込まれて死んだ。
スバルの背中に背負っている竜の大刀『ペンドラゴブレイド』はアーサァの形見のデバイスである。

それを聞いた隼樹、セイバーはもちろん、マジカルルビーは……涙を流した。

「メッチャせつねぇじゃねぇか、それぇ～！（涙）」
「そうだったんですか……貴方もイヤと言うほどつらい思いをしたんですね……！（涙）」
「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉんん！悲しすぎますよぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！（涙）」

3人が動揺して涙を流す。
原作の設定崩壊とかそう言うのはどうでも良く、スバルの悲しすぎる経験が涙が流すほど悲しいのであった。

だがそれと同時に隼樹はスバルの4年前から思い出す。

4年前にスバルを助けたのがなのはじゃなく銀時だったから、スバルのキャラ設定は変わってしまったと隼樹は確信する。
しかも銀時からによれば、何やら『えいりあん』っと言う異種生命

体に囲まれて、そこで再会したスバルと一緒に事件を解決したが、後に機動六課に保護される形で機動六課に入ることになった。
完全なる原作設定とは大違いである。

（しかし、スバルが剣術を……だとすればスバルって原作でも格闘じゃなくて剣術学んだ方が強いんじゃねぇ！？）

そう思い込む隼樹だが、ともあれとにかく2人が加わった所で銀時と隼樹は今の状況を話し出す。

「まぁ、とりあえずここであった事だし……スバル、良く聞けよ？今の状況を」
「ちょうど良かった。セイバーに今の状況を話しておかなきゃいけない事があるんだ」

2人はスバルとセイバーに世界の危機を話し出す。
それを聞いた2人は……

「ってそれってヤバイよ！」
「だとすればこんな所で話している場合じゃないですか！」

当然のように慌てだす。

「だからだ。俺達は今ここで力を合わせてその魔導師をぶっ倒す！」
「こんなふざけた状況を終わらせる為に！」

銀時と隼樹がそう言うと、スバルとセイバーも頷いて賛成する。
そして互いに片手を乗せあう。

「んじゃ、皆で一緒に犯人を確保して脱出するぞ」

「おう」
「はい」
「了解しました」

銀時、隼樹、スバル、セイバーの４人は力を合わせてる事を誓いだす。
その光景にマジカルルビーは微笑む。

「くぅ～～～めっちゃ良い眺めじゃないですか！次元を超えた友情は正にこのことですねェ！」

っと感心したその時、

ゴガァ！

「！？」

突如、石山が襲ってきて５人は走って逃げ出す。

「どぁあああああああああ！一体どうなっているんだぁ！？」

隼樹が叫びだす。
しかも前からは海の竜巻が何本も発生しており、瓦礫が暴れだすかのように台風に飲み込まれて回りだす

「なんなんだよコレは！？まさか犯人の悪戯なのか！？」
「いえ、アレは空間全体が流動していますね。元々不安定だったので長くは持ちません」

ルビーがそう言うと、目の前にはもう行き止まりである。

そこでスバルが……

「ウィングロード！」

すると、スバルの周りから2つの水色の道を宙に作られ、柱が今ビルの前に囲むかのように球体の形で表している。

「投影魔術による魔力の柱！？いや、似ているがコレは始めてみる魔法だ！」

セイバーはスバルの放った魔法に驚きを隠せなかった。

「銀さん、隼樹さん、セイバーさん、ルビーさん、早くウィングロードに！」

スバルがそう言うと、銀時達は『ウィングロード』に入ると、石山はビル全体を飲み込んで破壊する。

間一髪の所で逃げ切れたが、その後に時空のゆがみなのか……角が生えていて漆黒に染まった悪魔の大群がこっちに襲ってきている。

「悪魔の軍勢だと！？」

「うわぁあ！何かすっごいの来た！」

セイバーとスバルは警戒する。

「あれは、この空間の汚染が何かの魔力によって生み出された汚染の化身ですね。戦闘力は一匹一匹は少ないですが、問題はその数が異常なまでに多いことですね」

ルビーがあの悪魔の大群の説明をする。

そして、セイバーは右手から聖剣である『エクスカリバー』の存在を表して両手で構えてスバルは『ＩＳ』である『神々の蒼翼（ラグナログ・ブルーヴィング）』を発動させて飛翔する。

「銀さん！」

スバルは銀時にスカリエッティから貰ったデバイスを使用することを要求する。
銀時も流石に今回ばかりは使用するしかないと考える。

「……隼樹、イメージで武器を投影したら……自分の理想の動きもイメージできるか？」
「え？」
「自分の矢が１００％当たるのとか、自分の動きは相手より確実に速いという風にイメージしろ。そうすればそのイメージは完全に使いこなせるはずだ。」
「銀さん……」

そう言って銀時はゆっくりと木刀をしまい、懐から機械装置が付いている手袋とを出して右手にかぶせる。

「忘れるんじゃねぇぜ……イメージするのは武器じゃない……てめェ自身の最強のイメージだ。セイバー」
「なんでしょうか、ギントキ？」
「隼樹をちゃんと援護して護ってやれよ」

銀時がそう言うと、「当然です」っとセイバーは言い出す。

「んじゃ、行くとしますっか……第６６６拘束機関解放、次元干虚数法陣展開！」

右手につけてある手袋を自分の右眼の前に上げると、手袋の真ん中についている機械仕掛けの装置が起動して，赤く光りだす。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

そして赤い光から銀色の魔力が大量にあふれ出て，銀時の体を包むかのようにその魔力は銀時の体に魔力を染み込ませる。

「何！？コレは……まさかあれはデバイス！？だとすれば銀さんが魔導師に！？」

どうして侍である銀時がデバイスを持っているか分からない。
しかもとてつもなく高い魔力は異常なまでの気がはなっており、セイバーとルビーも驚きだす。

「何て禍々しくも巨大な魔力だ！」
「すごいです！坂田銀時の魔力が急激に上がって……キャスターランクを軽く超えています！？」

セイバーは異常なまでの魔力に驚き、ルビーは銀時の魔力はキャスターランクを上回っていると驚く。

「『銀の魔導書（ブレイシルバー）』……機動……っ！」

銀色の魔力は消えて、目の前には銀時の姿が現れた。
右手に持っているのは、『●LEACH』に出てくる『天●斬月』にそっくりの、通常の日本刀より少し長くて全てが銀色に輝く長刀。
唾は卍の形をしていて柄頭に途切れた鎖がついている。
腰にはその刀の鞘と『●LAZBLUE』の『●グナ・ザ・ブラッ

ドエッジ』の使用する大剣を背負っている。
バリアジャケットは、黒のシャツの上から銀色のコートを羽織り、袴のような黒いズボン。
コレこそが銀時の魔導師としての姿。
だがそんな姿を唖然と見る隼樹は……
「……ぎ……銀さん……これ、どう見たって『●ＬＡＺＢＬＵＥ』の『●グナ・ザ・ブラッドエッジ』の衣装と一緒なんですけど？」
そう言って呆れる隼樹に銀時は……
「うっせぇー！俺だって本当はこの姿に疑問を感じているんだよ！でもこの状況はイヤでも使用しなきゃいけない状況なんだよ！」
っと逆切れするように叫びだす。
実はコレはスカリエッティの完全なるネタパクリによるバリアジャケットである。
使用デバイスも●グナだけじゃなく黒崎●護と一緒である。
「銀さん、来ます！」
スバルがそう言うと、悪魔の大群が銀時達に襲いだす。
「しゃあねぇ！んじゃ援護頼んだぞ、隼樹！デモン・シルバーウィング！」
銀時の足元に銀色の魔法陣が現れ、右肩に銀色に輝く悪魔のような片翼が生えてきた。
そして飛翔してスバルと空戦で並べると、２人とも刀を構えて一斉

に悪魔の大群に突撃する。

「てゃあああああああああああああああ！」
「うぉおおおおおおおおおおおおおお！」

２人の剣が悪魔達を次々と斬りまくる。
悪魔達の体はゴミのように塵場って行くばかりであった。
銀時はデタラメな振りだが、変化自在の剣術で次々と悪魔を切りまくる。

「はいィィィィィィィィ！次ィィィィィィィィ！」

さらに大きく刀を振るうと、一瞬にして４・５匹の悪魔が吹飛ばされて真っ二つに斬られる。
元々強い銀時だが、魔力の影響によってそれがさらに一段と強くなったのである。
魔法の力を得た銀時は正に天下統一とも言っても良いほどな強さを持つ。
そして左手から大剣を抜き取り、

「ドライブ・ブレイカー！」

凄まじい速さで突進し、一閃の如くの速さで一気に１０体の悪魔を斬って吹飛ばす。

「はぁあああああああああああああああああ！」

スバルも神速の居合い剣術を炸裂させて、次々と数える暇がないほどに悪魔を切断して倒す。
陸戦でも有利だが、ＩＳによって飛行能力が付き、空中戦でも可能

になった。
そして『ペンドラゴブレイド』を背中に背負っている『ペンドラゴブレイド』を右手に持ち、

「スティンガァ・レッド・レイブレイク！」

思いっきり投げると、『ペンドラゴブレイド』は赤い閃光の如くに次々と悪魔達を貫通する。
そしてスバルは瞬間移動的な速さで『ペンドラゴブレイド』の所までワープするかのようについて『ペンドラゴブレイド』の柄を握り、そのまま落下するかのように、両手で持った『ペンドラゴブレイド』をそのまま振り下ろして悪魔を無数に切断する。

「す……スゲェ……」

一方の隼樹は銀時とスバルの異常なまでの強さに見惚れてしまった。
魔法なしでも十分強いのに、魔法によってさらに空中戦も可能にして魔法と剣術の合体させた強さを発揮する銀時。
原作とは大違いの強さを発揮し、神速並の剣術に2つのデバイスを自由自在に操るスバル。

だがすぐに我を取り戻した隼樹は我に返ってイメージを開始する。

「イメージ、イメージ、イメージ！」

そうつぶやきながら、右手には矢を左手には弓が現れ、弓を構えてイメージする。
自分の放った矢が1本で3体の悪魔を突き刺すイメージを。
そして矢を放って、放たれた矢は3体の悪魔を串刺しするかのよう

に射殺す。

「当たった！よし、行ける！」

やる気をだした隼樹は続けて右手から矢を投影し続け、そして何本も矢を放って次々と悪魔を射殺すのであった。

そんな悪魔は隼人の存在に気づいて接近する。

その数は３０匹で、その爪で切り裂こうとするが……

「てぇやぁあああああああああああああああああああああああ！」

セイバーの竜巻の如くの豪快なる剣技が炸裂し、３０匹の悪魔達を追っ払う用に切り裂く。

「ジュンキには近づけさせない！我が剣で返り討ちにしてくれる！」

騎士王の名に恥じない気迫で悪魔達に言いだすと、悪魔達は怯えて動きをみぶくさせる。

その隙にと銀時とスバルは……

「エンドレス・シルバーホワイト！」

銀時は右手から、悪魔のような巨大な手から巨大な白銀色の魔力弾を放って、一気に５０匹以上の悪魔を瞬殺した。

「一騎当千剣技……」

スバルは居合いの構えをして……

「無刃（むじん）・疾風静激（しっぷうせいげき）！」

翼を大きく広げて悪魔達に突撃すると、神速の連激剣舞を炸裂させて竜巻のような剣速と剣圧が次々と悪魔達をバラバラに切断して掃滅していく。

その太刀筋が眼にも映す事は不可能と思わせる。

そして2人によってさらに悪魔達は数多く消滅した。

スバルは『ティルヴィングエア』を納刀して、ゆっくりと『ウィングロード』で作られた橋に下りると片翼を消す。

そしてセイバーと背中を合わせだして囲んでいる悪魔達を見つめる。

「まだたくさんいるけど、だいぶ片付いたね」

「はい、以下に数が多くても1匹1匹の戦闘力は高くありません……それにしても貴方、かなり出来ますね。コレほどまでに剣術に長けた戦士と出会えるのはいつ以来か」

「セイバーさんも凄いですよ。銀さんとアーサァ以外に以外にこんなに凄い剣士に出会えたなんて、得しちゃったよ」

お互いに剣士としての強さを認め合う2人。

「不思議だよ、セイバーさんと一緒に戦うと、何かアーサァと一緒に戦っている雰囲気がする」

「私もですよ、スバル。貴方とは初めて会うのに、何故か意気が合うように思えます。」

不思議そうにコンビネーション良くスバルとアーサァは次々と悪魔を切り倒す。

『ティルヴィングエア』での神速剣舞が次々と悪魔を切断してバラバラにする。そして宙に浮ぶ悪魔の胴体を踏み台にして次々と中に飛翔して、背負っている『ペンドラゴブレイド』を両手に持って落下加速を追加して大きく振ると、地面に突き刺さった衝撃が炎に包まれて悪魔を火だるまにすると、神速ほどじゃないがすぐさま『ペンドラゴブレイド』を豪快に素早く振って次々と悪魔達を焼き斬るスバル。

そして『エクスカリバー』を豪快に振るい、スバルほどの速さはなくてアーサァみたいな力はないが、それでも突風の如くの素早い力ある剣速はパワーとスピードのバランスが取れなきゃ出来ないっと思わせるほどの辰馬気が発生するかのような剣撃は、一振り一振りが一気に2・3匹を斬る勢いを持っていて、次々と悪魔達をなぎ払い、真っ二つ、一刀両断、のくり返しをしながら聖剣を振るうセイバー。

斬る。

斬る。

そしてまた斬る。

蒼い刀と黄金の聖剣

息の合った2人の少女のコンビネーションは正に、戦場を美しく舞う2人の姫騎士その者であった。

（セイバーさん、やっぱり凄い！パワーはアーサァに及ばないけどその分、動きに全くの無駄がない。しかも力ある剣で1つ1つの太刀筋に威圧感を放っていて威力がある！攻守共に完璧な剣術、正に

騎士の剣その者！もしかしたら、剣の腕は銀さんに匹敵するかも知れない！）
（大した剣術だ！スバルの速さは完全に私以上だ。神速とも言っても良い居合い剣術と魔術の連係、それに彼女自身の魔力はかなり高いはずなのに、剣術だけを中心に戦って温存している！素早い細長い剣と背中に背負っている豪傑の力を持つ竜の大剣を自在に操っている！）

敵を倒しながら、お互いに相手の剣技の感想を言いだす。

（もし、セイバーさんが魔導師に目覚めたら……）
（もし、スバルがサーヴァントとして呼ばされたら……）

そして互いに一歩大きく踏み出し、

（絶対に最強の魔導師になっているかもしれない！）
（絶対にセイバーのサーヴァントとして召喚されます！）

スバルの神速の居合いとセイバーの一撃が放たれ、それぞれ悪魔を真っ二つに斬る。

「スバル、一気に行きますよ！」
「はい！」

そして互いに背中を合わせると、一気に大技を炸裂させる。

「ティルヴィングエア！」

シュ　シュ　シュ　シュ　シュ

≪Ｉ　ｏｐｅｒａｔｅ　ｂｙ　ｍａｇｉｃ　ａｔｔａｃｋ！≫

スバルは『ティルヴィングエア』を振り回し、その後アーサァに向けて構えると、足元から蒼い魔法陣が現れる。
そして回りから大量に精製された蒼い魔力刀が次々と現れ、その数は５００本以上は作られる。

「はぁあああああああああああああああああああああ！」

セイバーは魔力を聖剣に収練する。
そして刀身から強烈な蒼い烈風が放たれて力を蓄えている。

「エアスティンガー・エクスキュードブレイド！」
「風王結界（インビジブル・エア）！」

スバルとセイバーは必殺技を同士に放つ。。
数多くの魔力刀と魔力が込められた蒼い突風が同時に放たれ、強烈な切れる烈風と蒼い閃光の如く放たれた魔力刀は、悪魔達を串刺しにしたりバラバラに斬ったりする。

「スゲェ……セイバーは相変わらずとしてスバルの強さが原作の常識を破っている程に高けぇ……だったら俺も！」

そう言って、隼樹はさらにイメージをして先ほど出した魔槍『ゲイボルグ』を出す。

（前から一度やってみたかったんだよなァ！）

今こそその機会であると想い、槍投げのような構えをして……

「突き穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルク）！！」

投げ放たれた槍はすさまじい威力をもって標的を襲い、真紅の閃光は次々と標的を襲い、次々と確実に悪魔を串刺して消滅させる。

「隼樹もやるじゃねぇか！」

感心するかのように銀時は言いだす。
そして銀時も翼を広げて、刀を素早く振るって悪魔を切り倒して行き、大剣を豪快に振って周りの悪魔をまっ二つにするなど数多く倒して行く。
残り悪魔のかなり少なくなってきた所で、悪魔達は何かに怯えるかのようにこの場を去っていく。

「なんだ！？」

突如の悪魔の大群の退場に驚きだす隼樹。
そして目の前にいる逆さまに突っ立っている時計塔が大爆発する。

「！？」

大きな爆発が発生した後、爆風の中から1体の漆黒の巨大な竜が現れる。
翼は４本生えていて、眼は金色に輝いていて爪は紫色に輝きだしている。
どうやらラスボスの登場であると銀時達は確信する。
ガァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！

放たれた咆哮は全てを圧倒する威圧感を放っていて、隼樹はもちろん、銀時、スバル、セイバー、そしてルビーをも圧倒する。

「あのドラゴンは……まさか、この空間の汚染が塊となって生み出されたこの空間の主！？」

ルビーが驚きだすかのようにそう言いだすと、竜は銀時達に気づくかのように睨みつける。

魔導師の仕業でもなく、全ては汚染の塊によって生み出された化け物の仕業であると確信するルビー。

「うわぁあ！何かラスボス来ましたね？」

「凄まじい禍々しい魔力の塊だ……もしかすれば私達でも苦戦しますでしょう……」

どうやって倒せば良いのか疑うスバルとセイバー。

そして竜は顎を開き、そこから緑色の炎を収束して行き徐々に大きくしていく。

「ちょ！あのドラゴン、何かこっちに向かって炎を出そうとしているんだけど！？」

隼樹は慌てて言い出すと、竜は口から超極大な緑色の火炎砲を放つ。

その威力は下手をすればなのはの『スターライト・ブレイカー』の5倍分の威力はあると考える。

「やば！」

「皆逃げっ！」

銀時とスバルは逃げるように言い出すが、速すぎて間に合わない。
槍思った次の瞬間。

「とぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

ルビーが銀時の前に現れて、そこから真紅色の巨大な魔法壁を銀時達を囲むかのように放つ。
そして緑色の極大な炎の奔流は魔法壁を飲み込む。

「どぅあああああああああああああああああああああああああああああああ！」
「ルビーさん！」

魔法壁で防いでいるとは言え、とてつもない衝撃にルビーは絶叫し、スバルは思わず叫びだす。
そして数秒後、極大な火炎砲は防げたが、ルビーはダウンする。

「ルビー！」
「大丈夫ですか！？」

隼樹とセイバーは思わず駆けつけると、ルビーの容態が半分が黒漕げとなっている。

「うう……お…恐ろしい威力です……アレを喰らえばいくら貴方たちでも……無事ではすまないと思います。しかも厄介な事に、あの竜には極めて高度な防御壁が張られています……いくら攻撃しても届けません……」
「馬鹿な！ではどうすれば良いのです！？」
「うぁああ！セイバー、アレ！」

隼樹が驚いて竜のほうに指を刺すと、竜は再び殺気の火炎砲を放とうとしている。
このままでは確実にお陀仏である。
しかも足場もスバルの放った、先ほどの火炎砲でバラバラになった『ウィングロード』のみとなっている。
万事休すかと思われたその時……

「だったら……この場にいる全員の最大攻撃を、あの汚染野朗に一斉に放てば良いだけの事だ……」

そう言って銀時は白銀の刀を両手で握って構えて、ありったけの魔力を収束させる。

「確かに……それしか手がない。残りの魔力も少ない気がするし、最後の一撃をコレにかけてみる！」

隼樹は銀時の考えに賛成し、残りの魔力を使ってイメージをすると、偽・螺旋剣を投影し、そして構える、

「分かりました！今残っている全ての魔力をあのドラゴンにぶつけます！『ティルヴィングエア』、カートリッジロード！」
≪Ｙｅｓ　ｓｉｒ！≫

ガシャン×7

スバルもカートリッジを7発ロードすると、『ティルヴィングエマ』の刀身がさらに蒼く光だし、宝玉から魔力が大量に溢れでて、それが螺旋を描くかのように刀身を包み、超高速回転をする。
まるで風が『ティルヴィングエア』の刀身へと集まっていくかのよ

うな勢いであり、暴風が起こって魔力の螺旋回転の出力が最大になる。

「承知しました！我等の一撃で、あの汚染の物体を倒しましょう！」

そしてセイバーの『エクスカリバー』が黄金に光りだすと極大な魔力が聖剣に収束される。
竜が先ほどの火炎砲を放とうとした瞬間に、銀時達の一撃も炸裂する。

「月牙（げつが）……」
「偽（カラド）・……」
「エア・アルテマ・……」
「約束（エクス）された……」

竜の口から緑色の超極大な火炎砲が放たれると同士に、銀時達の一撃も放たれる。

「銀翔（ぎんしょう）！！！！」
「螺旋剣（ボルク）！！！！」
「ギガブレイカー！！！！」
「勝利の剣（カリバー）！！！！」

銀色の極大な斬撃、赤い閃光、蒼い閃光、黄金の極光砲。
４つのはどうが渦のように交じり合って緑色の火炎砲を押し消して、そしてさらには高度な防御壁を打ち破って、竜の体全体を飲み込む。
ガァアアア！

悲鳴を上げる竜の体は徐々に消滅して行き、そしてついには消えてしまったのである。

「や……やったぁあああああああああああ！」

勝利に喜びだす隼樹だが、ルビーから渡された首飾りの宝石が砕け散る。

コレでもう、イメージを使っても先ほどのようには戦えなくなり、投影した宝具も使いこなせなくなった。

しかし、隼樹はもう十分であった。

なぜならこの出来事の原因を打ち倒した結果……

「おおぉー皆さんお見事です！皆さんの力が合わさった結束の力が……あの禍々しきドラゴンを倒せたのです！コレにより、貴女達は元の世界に戻れますよ！」

「本当ですか！？」

ルビーの言葉にスバルは喜びだす。

そして銀時の姿もいつもの着物の衣装に戻る。

こうして何もかも一件落着で終わる中、突如ルビーの体が光りだす。

「ルビー？貴方の体が……」

セイバーは驚いて叫びだすと……

「ああ、コレはこの空間が自然的に消えていく合図でしょう。でも安心してください。元となった空間を乱す魔力は打ち消されて、皆さんは元の世界に戻れます。でも最初は私からのようですね」

「ルビーさん」

少し寂しそうにルビーの名を言いだすスバル。
「短い間でしたが、皆さんと一緒にいられて良かったと思います。それでは、皆さんの健闘を祈っています！さよぉ～なら～！」
そう言って、ルビーは光に包まれて消える。
すると、銀時達も光出す。
「どうやら、俺達も元の世界に戻れるようだぜ？」
「……そうだな……」
銀時がそう言うと、隼樹は寂しそうに言いだす。
短い間だったが、銀時とスバルと一緒に戦えた事は今思えば良い思い出になると思うが……下手すればもう二度と会えないかもしれない。
「何しけた面してんだよ？」
「え……」
「お前とセイバーのいる世界でも、フェイト達が待っているだろ？確かに俺達は元の世界に戻る事となれば、もう二度と会えないかもしれないが……それでもお互いに相手を忘れてなきゃ……いつかまた会えるかもしれねぇぜ？」
「銀さん……」
銀時の言葉に、殺気までの不安が消えた隼樹は安心して笑い出す。
「ギントキの言う通りです、ジュンキ。私達がお互いに忘れなければ、いつか再会は果たせます。住む世界は違えど、この場で共に戦った真実は偽りではありません。そして……私もギントキとスバル

の事は忘れません」
「セイバーさん……いやセイバー、私もセイバーと隼樹さんに出会えて良かったです。一緒に戦った事はずっと奥底に刻んでおくように記録します」
「ええ、今度また出会った時には是非とも剣と剣の手合わせを願いたいですが、それ以上にまた友に戦える日と楽しみに待っています」
「私もだよ、セイバー♪」

スバルとセイバーはお互いに握手する。
それは別れの握手ではなく、いつか再会を果たすための握手である。

「というわけだ、今度また出会った時に困った事があれば何でも言って来い。その時には……万事屋として何でも解決してやるよ」
「ははは……頼もしいなぁ」
「但し依頼量はちゃんと貰うけどな……」
「……ちゃっかりしている……」

苦笑する隼樹に銀時は笑い出す。

「今でも信じられないよ。俺みたいなヘタレオタクが……皆と一緒に戦えた事に今でも不思議に思える。……ルビーから渡された宝石の影響とは言え……俺、役に立てたのかな？」

不思議にそう思う隼樹だが……

「ヘタレオタクなんかじゃねぇよ」
「銀さん……」

銀時の言葉に隼樹は意外そうな表情をする。

「世界中の誰もが隼樹を蔑もうとも、俺達だけは知っている」
銀時だけじゃない。
スバルも、セイバーも一緒である。
「てめーが体を張って護ったもんを……てめーが己を弱輩と知ってもなお、自分自身の大切なものを護ったもんを」
銀時の言う隼樹の大切なものとは、言うまでもなくセイバーであった。
2人の雰囲気を見て、銀時は隼樹とセイバーの絆は深く強い事を確信したのである。
「てめーはヘタレオタクなんかじゃねぇ。……1人の立派な人間だ」
銀時がそう言うと、隼樹は嬉しそうに笑い出す。
伝説の白夜叉相手に自分がそこまで言われると、自信が取り戻していくと同時に胸を晴れる気がした。
その光景にスバルとセイバーも嬉しそうに笑う。
「まぁ、新八もお前を見習ってもらいたいぐらいだな。なんせアイツ、地味なムッツリスケベのロリコンアイドルオタクだから？」
「どんだけ新八に厳しいの！？ってかさっきより酷くねぇ？」
せっかくの感動が台無しにするかのような銀時の一言で隼樹は大きくツッコム。
そしてお互いの光が強くなっていく。
「隼樹……」
「はい？」

銀時は隼樹の名を口し……

「……大切なものを護れるぐらい、強くなれよ」

そう言いだすと、

「はい！」

隼樹は潔く返事をする。

「また会いましょう。スバル、ギントキ」

「うん、また会おうね、セイバー、隼樹さん」

「銀さん、スバルちゃん、また会えると信じているよ」

「ああ……またな、隼樹、セイバー」

そして4人は光に包まれてこの場から姿を消す。

その後、この空間は消えてなくなる。

こうして数多くの時空の世界の爆破はとある4人と1つの魔法スケッチによって阻止されたのであった。

マンションの屋上

銀時とスバルは、気が付けばいつもと同じく自分達の部屋に寝ていた。

アレは夢であったのかと疑うが……しかしそう考えればアレは現実的であったと2人は確信する。隼樹とセイバーも今頃は元の世界で

自分達と同じように考える。
そして2人はマンションの屋上で空を見上げ、あの出来事を思い出す。

「何か不思議な体験でしたね」
「……ああ、夢だと思っていたら、ちゃんと記憶に残っていやがる……やっぱりアレは現実に起こっていた事だな……」

あの出来事以来、3人は次元空間で出会った男女の事を時々思い出す。
隼樹とセイバー、そしてマジカルルビーである。
短い間だったが、3人と出会えた事は偶然じゃないと時々2人は思い込む。

「今頃……3人とも私達と同じように空を見上げて私達を思い出しているでしょうか？」
「ああ、そうかもな」

今頃何をしているのであろう？そして今頃どう思っているんだろうっと、2人はただ考えるばかり。

（デタラメな体験だったぜ。でもま、違う世界に住んでいるとは言え、もし違った出会い方をすれば確実に仲間になっていたかもな。だからお前もお前なりに頑張れよ……隼樹）

空を見上げて銀時とスバルは、異世界で出会った時空を超えた仲間達の顔を思い浮かべるのであった。

進む道は違えど、彼等との出会いは紛れもなくそこにはあった。

「……あのう……」

突如の声に、銀時とスバルは後ろを振り向く。
しかも慌ただしく。それもそのはず、その声はどこかで聞いたような声であった。
振り向いた場所には……

「何か……この世界に飛ばされちゃったみたいですね」

っとやっちゃったー！っと言う風に言い出すマジカルルビーが存在した。
2人はどうしてこの世界にルビーがいるのか不思議がる中……

「いやー！すみませんね♪しばらくこの世界でお世話になりますので……よろしくお願いします♪」

っと2人に向かって気楽そうに言い出すと……

「……え？……ええエエエ！！？？」

銀時とスバルは叫ぶしかなかった。
かくしてマジカルルビーはミッドチルダに次元漂流者としてしばらく厄介になるのであった。
彼女が銀時達ともにどのような活躍をし、そしてどうやって元の世界に戻れるかは、それは別の機会で。

（後書き）

以上です。

実は『月間コンプエース　２０１０年　５月号』の『魔法少女リリカルなのは×プリズマ☆イリヤ』を見て書きたくなった小説です。

なぜ赤夜叉さんの『イメージ』と合成したかったというと、理由はただ１つ。

隼樹に是非とも銀時と出会わせたかったからです。

ってな訳で、これからも僕の『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ～攘夷戦争鎮魂歌～』と赤夜叉さんの『イメージ』をよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8002k/

『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ～攘夷戦争鎮魂歌～』×『イメージ』　異次

2010年10月21日07時54分発行